

生氣の無い勞働者はぞろ／＼と入り込んで俺の腦髓にツルハシを打込み
ガツ／＼と餓えた獸の様にかき集める
空虚になつた俺の頭に

石と土とをなげこんで

重いローラーを引き廻すのだ、そして

夕暮には

がら／＼とその上を荷馬車をひいて歸るのだ

自己燃焼から

一九三一・一二・二日

憂鬱なる墓標。

憂鬱なる圖書館に溢るゝ

蒸す様な思想の渦卷に

閉ぢ込められた情熱が湧立つ。

眞理と眞理が互に闘争し

傷ける血潮は空間に迸り

世紀の斷層に浸潤する。

薄暗い圖書館に充滿せる

憂鬱なる墓標の堆積!!

憶 ひ 出

風は憶ひ出に驅られて
寂莫の街路を狂奔する。

うらぶれた街の家々は

風の憶ひ出に揺す振られ

憶ひ出は彼等を上機嫌にする。

惱みつゝ迷ひつゝ

私は今日も風を追ひかける。

或る一瞬

太陽は心からの愛と憎惡に狂ひ
山は鬱積した憂愁を爆發させる

傾く大地、沸騰する海洋、

亂舞する水蒸氣の嵐の中に

小利口な人間共の肢体が

飛び散る!! 飛び散る!!

彼等が誇る總ての文明と共に。